



営農タイムリー！



発生予察情報について(4月)

2024年4月4日発行

病害虫発生予報第2号(4月)

京都府病害虫防除所より、4月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第2号(4月) (抜粋)

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
ナシ	黒斑病	多
カキ	カキクダアザミウマ	並
キャベツ	菌核病	やや多 (やや多)
アブラナ科野菜	コナガ アブラムシ類	並 (やや少) 並 (やや多)

野菜

1. キャベツ 菌核病

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は20℃前後、曇天雨が続く時に発生しやすい。
- (2) 発生終期に形成された菌核は土中に落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で2~3年間生存可能である。
- (3) 発病株は菌核を形成する前に抜き取り、土中に深く埋めるなど処分する。



■ 菌核病の防除体系 例

発病前は

M07(M)

ベロコート

[1000倍 収穫14日前まで/3回以内]

ベロコート

[1000倍 収穫28日前まで/3回以内]

予防剤を ローテーション散布

発病が認められたら

12(E2) セイビアー (株腐病)

[1000倍 収穫前日まで/3回以内]

11(C3) シグナムWDG

[カンタス+カビオ]

[1500倍 収穫7日前まで/2回以内]

(株腐病、黒斑病、べと病)

2(E3) ロブルール 水和剤 (株腐病)

[1000倍 収穫7日前まで/4回以内]

治療剤を加えた ローテーション散布

11(C3)

ファンタジスタ

顆粒水和剤

[2000~3000倍 (灰色かび病)

収穫3日前まで/3回以内]

(2000倍 株腐病、黒斑病、根朽病)

アミスター20

フロアブル

[2000倍 収穫7日前まで/4回以内]

(株腐病、黒斑病)

メジャー

フロアブル

[2000倍 収穫3日前まで/3回以内]

(株腐病、べと病、ピシウム腐敗病)

7(C2)

パレード20

フロアブル

[2000~4000倍

収穫前日まで/3回以内]

(株腐病、根朽病)

アフエット

フロアブル

[2000倍 収穫前日まで/3回以内]

(株腐病、根朽病、灰色かび病)

※ (病害名)は、菌核病以外の登録病害。他病害と同時防除できます。

野菜

2. アブラナ科野菜 アブラムシ類

予報内容 発生量：平年比並（前年比 やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (2) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。
- (3) 野菜等をは種又は定植する際には、シルバーフィルムやムシコン等のマルチを被覆するか、シルバーテープを張り、有翅虫の飛来を防止する。また、早期発見によりアブラムシ類の防除に努める。

アブラナ科野菜には主に3種のアブラムシが寄生するが、**ダイコン、ハクサイ**にはニセダイコンアブラムシとモモアカアブラムシ、**キャベツ、ナタネ**にはダイコンアブラムシが多い。吸汁による直接害の他、各種ウイルス病を媒介する。

モモアカアブラムシ

特徴：移住型のアブラムシで夏寄主は**アブラナ科野菜**の他**ナス、トマト、ピーマン、タバコ、ホウレンソウ**など多くの作物が知られている。冬寄主はモモ、スモモで卵態で越冬する。しかし、関東以南の暖地では、野外のアブラナ科野菜、雑草に胎生で越冬しているのも多く見られる。発生は4月上中旬から、5月中下旬がピークとなり、6月下旬には少なくなる。9月中下旬から11月上旬にかけ再び多くなるが、春世代に比べ一般に少ない。胎生雌には淡緑色～淡黄色、および淡赤色の2系統があり、冬期には淡赤色が多い。

ダイコンアブラムシ

特徴：アブラナ科作物のみに寄生し、特に**キャベツ、カリフラワー、コモチカンラン、ナタネ**に多い。成・幼虫とも白色状の分泌物を体表に付着し、寄生する場合コロニーを作る。本種は低温に適しているようで、4月中～下旬から多くなり、梅雨期までに急激に増殖するが、夏・秋には少ない。

ニセダイコンアブラムシ

特徴：**ダイコン、ハクサイ**に多く、体は黄緑色でうすい白粉を体背におびている。発生は夏播・秋播に多く、秋期に高温がつづく就多発する。

モモアカアブラムシ



ニセダイコンアブラムシ



■ キャベツ アブラムシ類の防除体系 例

育苗期に

定植時に

28 ベリマーク SC

[400倍/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊(約30×60cm、使用土壌約1.5~4L)あたり0.5L/育苗期後半~定植当日/灌注/1回]
(アオムシ:アザミウマ類:ウワバ類:コナガ:ネキリムシ類:ハイマダラノメイガ:ハスモンヨトウ:ヨトウムシ:シロイチモジヨトウ)

1B ジェイエース 殺虫剤 粒剤 [3~6kg/10a(1~2g/株) / 定植時/植穴処理/1回]
(アオムシ:コナガ:ヨトウムシ)

OR

28 プリロツン 殺虫剤 オメガ
[2g/株 / 育苗期後半~定植時 / 株元散布 / 1回] (アザミウマ類)
[1g/株 アオムシ:コナガ:ハイマダラノメイガ]

発生が認められたら

1B ジェイエース 殺虫剤 水溶剤 (アオムシ:コナガ:タマナギンウワバ:ハスモンヨトウ:ヨトウムシ)
[1000~1500倍 収穫30日前まで/1回]

29

ウララ DF

[2000~3000倍 収穫前日まで/2回]

4A

スターフル 顆粒水溶剤 [2000~3000倍 収穫3日前まで/2回]
アルバリン 顆粒水溶剤

ダントツ 水溶剤 [2000~4000倍 (アザミウマ類) / 収穫3日前まで/2回以内]
[2000倍 アオムシ:コナガ]

モスピラン 顆粒水溶剤 [2000~4000倍 (アザミウマ類) / 収穫7日前まで/5回以内]
[1000~2000倍 アオムシ:コナガ:キスジノミハムシ]

23

モベント フロアブル

[2000~4000倍 収穫7日前まで/3回] (コナガ)
[2000倍 アオムシ:アザミウマ類]

4C

トランスフォーム フロアブル
[2000倍 収穫前日まで/3回]
(ネギアザミウマ)

28

ベネビア OD

[2000倍 収穫前日まで/3回] (アザミウマ類)
[2000~4000倍 アオムシ:ウワバ類:オオタバコガ:コナガ:ハイマダラノメイガ:ハスモンヨトウ:ヨトウムシ:シロイチモジヨトウ]

ヨーバル フロアブル

[2500~5000倍 収穫前日まで/3回]
(アオムシ:アザミウマ類:ウワバ類:オオタバコガ:コナガ:シロイチモジヨトウ:ハイマダラノメイガ:ハスモンヨトウ:ヨトウムシ)
[2500倍 キスジノミハムシ:バッタ類]

9B

コルト 顆粒水和剤

[3000~4000倍 収穫前日まで/3回]
[3000倍 ネギアザミウマ]

21A

F:39(C1)

ハチハチ 乳剤

[1000~2000倍 収穫14日前まで/2回]
(アオムシ:コナガ:ハイマダラノメイガ)
[1000倍 アザミウマ類]

※ (害虫名)は、アブラムシ以外の登録害虫。害虫と同時防除できます。

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1. 苗立枯病

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温多湿に経過するとピシウム属菌、高温多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30℃の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに薬剤防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2. もみ枯細菌病（苗腐敗症）

- (1) 病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。
- (2) 出芽時の温度は30℃を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3. 苗いもち

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い、塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、粃がらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

4. 種子消毒について

- (1) 温湯消毒を行う場合は必ず乾粃を用い、処理温度と時間を厳守するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また、各温湯消毒器の使用上の注意事項を遵守する。

今後注意すべきその他の病害虫等

5. スクミリンゴガイ

- (1) スクミリンゴガイは在来のタニシ類などに比べて貝殻が薄く傷つきやすいので、ロータリー一耕うんにより機械的に貝を破碎し密度を低下させることができる。水田の土が硬くなる水稻収穫後の耕耘が最も殺貝効果が高い。また、土中に潜って越冬するが、その深さは6cm未滿が大部分なので、耕うん深度は浅くてよいが、できるだけ土の硬い時期にピッチを小さくして(通常の1/2以下の作業速度が望ましい)いっきに耕うんすると殺貝効果が高くなる。さらに、越冬場所をなくすため、水路の泥上げを地域全体で行うと効果的である。
- (2) 苗を移植する前に、田面を細かく耕うんし、越冬した大きな貝を殺す。
- (3) 水路からの侵入を防止するため、取水口に9 mm目合程度のネットなどを設置する。
- (4) 耕うんや代掻きの時に農業機械がほ場間を移動する場合には、泥とともに機械に付着した貝を移動させないように、都度洗浄を行う。
- (5) 貝が水稻に被害を及ぼすのは田植え後、約3週間までで、その間、水深を出来るだけ浅く保つ。水深1cmが理想だが、4cm以下に保つと実害が出にくい(貝は水中でのみ接触する生態のため)。
- (6) 圃場の均平が重要である。圃場が凸凹だと深いところの株が食害され、一方、土が水から長時間露出すると除草剤の効き目が劣ってくる。田植え前に圃場の高低を修正するとともに、被害が生じやすい田植え直後は極く浅水とし(一部の土が水面上に出ても)、徐々に水深を増加させるなどの工夫が必要。
- (7) 前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

野菜

1. 野菜苗の害虫類

- (1) 苗の定植に当たっては、害虫が寄生していないことを確認する。なお、アブラムシ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類、コナジラミ類など微小な虫は見逃しやすく、ウイルス病を媒介する虫種もあるので注意する。

令和5年度にはキュウリにおいて、アブラムシ類が媒介するとされる「Cucurbitaphid-borne yellows virus : CABYV」及びタバココナジラミが媒介する「ウリ類退緑黄化ウイルス」が府内で初めて確認されたので注意する。